

## 蘇東坡「菩薩泉銘」考

一

蘇東坡（名は軾。一〇三六〜一一〇一）が黃州流謫の初期に撰した「菩薩泉銘」（『蘇軾文集』卷十九）は、その名が示すように文殊菩薩像所縁の泉を讚えた文として知られている。<sup>①</sup>東坡は「雩泉記」「六一泉銘」など数多くの泉にまつわる文を遺しており、それらは多かれ少なかれ、それぞれに伝わった謂われを投影させているが、この銘文の背景となった説話は、その古さと知名度の点で一頭地を抜きん出たものと言えよう。そこには古代インドの阿育王（アショーカ王）に始まり、晋の名将陶侃や、さらには廬山で念佛結社を開い

吉 井 和 夫

た名僧慧遠法師までもが登場し、まことに靈驗譚の典型とも言うべき面を有している。銘文はこうした説話を巧みに引用しつつ、過不足のない簡潔な一文にまとめ上げたものであるが、その前後の東坡をめぐる情況を考えると、そこへ行き着くまでの道程は、その文面から受ける印象とはかけ離れ、決して平坦なものではなかった筈である。

本稿では、東坡が撰文にあたって、六朝以来伝えられてきた話から何を選択し、それをどのように変容させつつ一文をまとめていったのかを探るとともに、この苛酷な時期に筆を執った経緯や、その撰文に多大な影響を与えた書物の存在についても些か私見を述べて

おきたい。

二

まず東坡と菩薩泉の出会いと「菩薩泉銘」撰述に至るまでの経緯を、簡略に記しておきたい。

北宋の元豊年間と言えば、神宗治世のもと、旧法党人に対する締めつけが漸く厳しさを増した時期にあつている。地方官を勤めながら、詩文の中で新法批判を繰りかえし表した東坡も、その内容が朝政を誹謗しているとの嫌疑で長期にわたる取り調べと獄中生活を経て、黄州（湖北省黄冈県）へと流罪になった。元豊三年（一〇八〇）二月一日、この長江中流域の小さなわびしい町へとやって来た東坡は、定惠院という僧坊を寓居とし、あり余る時間を参禅や近辺の探索に割くこととした。するとその高名を慕って近隣から人が集まりはじめ、そこに遠くから心配してやって来る知人も加わって、東坡の回りには確かに文化サークルの如き様相を呈してきた。その主だった人物として黄州知事

の徐大受や武昌知事の朱寿昌といった名を挙げる事ができるが、<sup>(2)</sup>その中に東坡と同じ蜀の出である杜沂<sup>とぎ</sup>という人物が混じっていた。<sup>(3)</sup>彼は長江を挟んで黄州の対岸にある武昌（湖北省鄂城市）から、わざわざ酴醪<sup>とび</sup>（と きんいばら）の花と菩薩泉の水を持ち帰って東坡への手土産としたため、それに感謝して東坡は「杜沂武昌に遊び、酴醪花菩薩泉を以て餉<sup>か</sup>らる 二首」（『蘇軾詩集』巻二十）の詩を詠っている。そのうち菩薩泉を詠じた第二首を、次に掲げておきたい。

君言西山頂 君は言う西山の頂

自古流白泉 古より白泉流ると

上為千牛乳 上は千牛の乳為り

下有万石鉛 下には万石の鉛有り

不愧惠山味 恵山の味は愧じざるも

但無陸子賢 但だ陸子の賢無し

願君揚其名 願わくは君其の名を揚げ

庶託文字伝 庶わくは文字に託して伝えよ

（四句略）

嗟我本何用

嗟我本と何の用ぞ

虚名空自纏 虚名空しく自から纏うまと

不見子柳子 見ずや子柳子

餘愚谿谿山 餘愚谿山を汚すをけいせん

君は言う 西山の頂では

昔から澄んだ泉が流れており

それが千頭の牛の乳のようであるのは

地下に万石の鉛が眠っているからだ

その水はかの恵山の味に劣らないが

ただ世に広める陸羽のような賢者がいない

そこであなたがその泉の名を揚げるため

文字に託して世に伝えてほしい

(四句略)

(君はそう勧めるが) ああ私など一体何の役に  
立つだろう

実体のない名声を自から纏っているに過ぎない

ごらんなさいかの柳子厚先生でさえ

溪谷を愚溪の名で汚してしまったではないか

この詩の詩語について少し注釈を加えると、恵山云々とあるのは、茶道の大成者陸羽がその山の水を天下第一

二泉と評したため、広く知られるようになったという  
故事に基づいている。また子柳子云々とあるのは、唐  
の柳宗元が流謫地永州の冉水に韜晦の意から愚溪と名  
付けたところ、意に反して辱めてしまったことを指し、  
私などの文ではその二の舞になってしまいますよとの  
意を含めたものである。

この詩にも見られるように中国では名水を貴重視し、  
高名人物に依嘱してこれを顕彰するといった例が多  
く、東坡も幾つもの文を遺していることは最初に述べ  
た通りである。この詩の第七、八句目に「泉の名を揚  
げるため、文字に託して世に伝えてほしい」とあるの  
は、それについて言及したものに外ならないが、これ  
には以前より二つの異なった解釈がなされている<sup>(4)</sup>。そ  
の一つは、この詩の一句目から十二句目までを杜沂の  
言葉とし、残りの四句をそれに対する東坡の言葉とす  
る解釈で、これに従えば杜沂が東坡に文を依嘱したこ  
とになる。もう一つは、杜沂の言は六句目までとし、  
七句目からはすべて東坡の言であるとする解釈で、こ  
れに従えば逆に東坡が杜沂に撰文を勧めたことになる。

これら二説のうち、筆者は折角この地に流寓した東坡に銘文を期待するのが自然であると考え、それに沿って訳しておいたが、何れにせよこの菩薩泉の水をはじめて味わった場において、すでに銘文が話題に挙がっていたことだけははっきりと認められるのである。

こうした出会いがあつて暫く後の四月十三日、東坡は念願の武昌へと渡り、街の西の山中にある寒溪や西山寺へと足を伸ばすことになった。<sup>(5)</sup> 付き従うのは杜沂とその息子たちである。ここで、その時に詠われた「武昌寒溪の西山寺に遊ぶ」(『蘇軾詩集』卷二十)の詩から摘句して、武昌がどういった地であるかを見ておきたい。まず詩はその地勢から説き起し、一日も早くそこへ渡りたかつた思いが綴られる。

連山蟠武昌 連山武昌に蟠り

翠木蔚樊口 翠木樊口に蔚たり

我来已百日 我来りて已に百日

欲济空搔首 济らんと欲して空しく首を搔く

連なる山々は武昌の街をとり巻き

緑の木々は樊口のあたりに鬱蒼と茂っている

私が黄州へとやって来てもう百日にもなるが渡りたくても為す術がなく頭を搔くばかりだつた

こうした表現から、東坡は黄州に流されてからにわかにその対岸に興味を抱いたのではなく、かねてより武昌を訪れてみたいと願っていたのではないかと推察されるが、それは、翌年に書かれた「樊山を記す」(『蘇軾文集』卷七十二)の一文によって確かめることができる。<sup>(6)</sup> そこには、十五年前に開封で亡くなった父蘇洵を故郷に葬るため、東坡と弟の蘇轍が柩を護つて長江を遡つていた際に、偶々武昌に立ち寄ったことが記されている、とりわけ印象深い地であつたことが読み取れるからである。続いて詩は、その長年の思いが叶つて、小さな舟に身を寄せて長江をおし渡り、背後の山を踏破する様子を描いている。

今朝横江来 今朝江を横ぎりて来る

一葦寄衰朽 一葦衰朽を寄す

高谈破巨浪 高谈巨浪を破り

飞屣轻重阜 飞屣轻重阜を軽んず

今朝には葦の葉のような小舟に衰えた体に乗せ  
長江を横ぎってやって来た

大きな波など物ともせず意気軒昂に語り合うと  
足どりは軽く幾重もの丘など気にもならない

ところで、武昌は単に山水の美に恵まれた地である  
ばかりでなく、歴史的にみても東坡の興味を惹きつけ  
るに足る史蹟がそこかしこに見られるところでもあつ  
た。古くは伍子胥や屈原についての伝承も残っている  
が、とりわけこの地が世の注目を浴びたのは、三国時  
代に孫権がここを鄂から武昌と改名し、呉の都と定め  
た時からであろう。<sup>(7)</sup> その当物を物語る遺蹟として、東  
坡が最初に足を踏み入れた劉郎<sup>りゅうろう</sup>洲は孫権が劉備を出迎  
えた場所として知られ、また西山がかつて樊山<sup>はんざん</sup>と呼ば  
れたのは、一説には漢初の剛勇樊噲<sup>はんかい</sup>の母と称する老女  
が孫権に向かつて魏の大軍に対する勝利を予言したこ  
とによると言う。その西山に程近い寒溪には避暑のた  
めの離宮が築かれたが、その往時を偲んだ詩が前掲「杜  
沂武昌に遊び……」の詩の第一首である。もちろん当  
時の宮殿がそのまま残っている筈もなく、それらが土

に埋もれ、あるいは草に覆われているところに、旅人  
は一層の感慨を催すこととなる。

離離見吳宮 離離として吳宮を見る

莽莽真楚藪 藪<sup>もうちゅう</sup>として真に楚藪<sup>そそう</sup>

空伝孫郎石 空しく伝う孫郎の石

無復陶公柳 復た陶公の柳無し

荒れ果てた吳宮の旧蹟は

いばらの藪が生い茂るばかり

孫権ゆかりの石は伝わっても当人の姿はなく<sup>(8)</sup>

また陶公が植えたはずの柳も残ってはいない

ここに陶公とあるのは、東晋の名將陶侃<sup>とうかん</sup>（二五九〜  
三三四）のことである。<sup>(9)</sup> 陶淵明の曾祖父に当たる陶侃  
は武昌に拠って力を蓄え、広州左遷を経たのち復帰し  
て一大勢力を築き、各地の反乱を鎮めるのに功績をあ  
げた。彼は柳をことのほか愛し、武昌の役所や門に多  
くを植えさせたところから、こうした表現がなされた  
のである。またこの詩には出てこないが、同じく東晋  
の高僧慧遠<sup>えおん</sup>（三三四〜四一六）も、廬山（江西省）で  
白蓮宗と呼ばれる念佛結社を開く以前にこの地に立ち

寄り、寒溪寺に駐錫し、西山寺を創建したと伝えられる。<sup>(10)</sup>

このように武昌は六朝時代には文化的、政治的、あるいは軍事的にも重要な地域の一つであったが、唐代になると李白や劉禹錫、元結、杜牧など、多くの詩人がこの地を訪れて作品を遺してはいるものの、歴史の表舞台からは徐々に忘れ去られていった。しかし、それがかえって東坡の目には、余生を送るのに相応しい地と映ったようである。

買田吾已決 買田吾已に決す

乳水況宜酒 乳水況んや酒に宜しきをや

私は終生ここで暮らそうと決めている

酒造りに適した乳水まで湧くとあれば尚更のこと

と

致仕して後も故郷に帰らず、気に入った土地を手に入れた終の棲家とする、いわゆる徙居買田は当時の士大夫の生き様を示す語であるが、ここでは東坡の武昌に對する思い入れの強さを表すものになっている。<sup>(11)</sup> そしてその理由として、素晴らしい菩薩泉が一役かっ

ると付け加えるのを忘れていないのは、水を贈ってくれた杜沂への配慮であろう。

右に挙げた詩句からも察せられるように、この度の武昌訪問は、東坡の期待を上まわる魅力にあふれていた。友人の陳季常に宛てた手紙の中で「奇勝殆ど聞く所に過ぐ」と記しているのが決して過褒でないことは、その後も事ある毎に足を運んでいることから察せられる。<sup>(12)</sup> たとえば五月末に弟の蘇轍が東坡の家族を黄州にまで送って来てくれた時は、翌月に兄弟そろって西山に遊んで詩を応酬し、翌年に友人の王適（子立）を見送る際も、わざわざ菩薩泉に立ち寄って「行を送るに酒無く亦銭も無し、爾に勸む一杯の菩薩泉」と詠っている。<sup>(13)</sup>

こうして黄州と武昌との間を頻繁に行き来していた東坡のもとに、十月頃になって季常という人物が尋ねてきた。季常（字は公扱。一〇二七〜一〇九〇）は東坡の門人である黄庭堅の舅にあたる人物で、東坡にとつて心を許すことのできる友人の一人であった。<sup>(14)</sup> 彼は、廬山にある白石菴で学んでいた時に九千卷以上の蔵書

を蓄えたが、やがて役人となって他所に移った後も全てそこに残しておいたため、これは後人を益する義挙であるとして東坡が熙寧九年（一〇七六）に撰じたのが「李氏山房藏書記」（『蘇軾文集』卷十一）の一文である。これは後に沈德潜の『唐宋八家文讀本』にも収載せられるなど人口に膾炙したため、李常には宋を代表する藏書家としてのイメージが定着することとなった。当時、李常は提点刑獄の任にあつて舒州（安徽省）に駐していたので、そこから長江を遡つて黄州を訪ねたところ、東坡はさっそくに李常を連れだし、西山へと向かつている。<sup>(16)</sup>「菩薩泉銘」の叙には撰述の繫年について結びつく直接的な表現は見られないが、李常の依嘱によつて撰じたという一節があるところから推して、おそらくこの時に撰文がなされたと考えてよいであろう。やや長いものではあるが、以下にその全文を挙げておきたい。

菩薩泉銘並びに叙

陶侃、広州刺史た為りしとき、漁人有り、毎夕神光を海上に見、以て侃に白もす。侃之を迹あせしめ、金

像を得たり。其の款識かんしを視るに、阿育王あいくわう鑄する所の文殊師利像なり。初め武昌の寒溪寺に送る。侃荊州に遷るに及び、像を以て行かんと欲するも、人力もて動かすこと能わず。益すに牛車三十乘を以て、乃ち能く船に至らしむ。船復た没し、遂に以て寺に還す。其の後慧遠法師像を迎えて廬山に歸るに、了つひに艱礙かんざい無し。山中世二僧を以て之を守らしむ。会昌中、詔して天下の寺を毀こぼしに、二僧像を錦繡谷かに藏す。釈教復た興るに比おび、像を求むるも得べからず。而して谷中今に至りて光景有り、往往はつげん發見す。峩眉、五台見る所の如し。蓋し遠師の文集に載す処士張文逸の文、及び山中の父老伝うる所此かの如し。今寒溪より少しく西すること数百歩、別に西山寺か為り。泉の嵌竇かんとうの間より出ずる有り。色白くして甘し。菩薩泉と号するも、人其の本末を知る莫なし。建昌の李常余に謂えらく、豈昔像あの在りし所ならんかと。且つ余に属しよして銘を為つくらしむ。銘に曰く、像は廬阜ろふに在りて、宵光天を爛くらす。且朝之を視れば、寥々りょうりょうたる空山。誰か

謂う寒溪と、尚斯なほの泉有るに。盍なほぞ往きて之を鑿みざる、文殊了然たり。

陶侃が広州の刺史であったとき、ある漁夫が、いつも日暮れ時になると海上に不思議な光を目にしたので、それを侃に報告した。侃は左右の者に漁夫の後をついて行かせ、黄金の像を手に入れた。そこに刻された文字を視ると阿育王が鑄造させた文殊師利菩薩の像であった。当初は武昌にある寒溪寺へと送ったが、侃は荊州へと任地が変わる際にその像を持って行こうとした。しかし人の力では動かすことができなかつたので、三十乗の牛車を加えて何とか船に積み込むことができた。ところが今度はその船が沈んでしまったため、侃も諦めて寺に還すこととした。その後、慧遠法師がその像を廬山に迎えようとしたところ、全く何の差しさわりも起きなかつた。山中では代々二人の僧侶に像を守らせていたが、唐の会昌年間に天下の佛寺を廃棄するよう勅命が出されたので、彼等は像を廬山の錦繡

谷に隠した<sup>17</sup>。その後ふたたび佛教が盛んになつたため、隠しておいた像を捜し求めたが、どうしても見付けることができなかつた。そのため谷の中では今でも時おり光輝く現象が見られることがあり、それは峨眉山や五台山に現れるものに似ている<sup>18</sup>。考えるに、慧遠法師の文集に載せている処士張文逸の文や、廬山に住む老人が語り伝えているものはこのような内容である。現在、寒溪から少し西へ数百歩行つたところに、(寒溪寺とは)別に西山寺という寺院があり、岩の窪んだところから泉が湧き出している。その水の色は白く、飲むと甘い。菩薩泉と名付けられているが、その謂われの一部始終を知っている者は誰もいない。建昌の李常は私に、泉が出るこの場所こそ、そのむかし菩薩像が置かれていた所ではないだろうかと言い、さらに私に依嘱して銘文を撰述させたのである。その銘には次のように言う。菩薩像は廬山にあって、夜に放つ光は天をも照らす。だが朝になって迎り

を見渡しても、人気のない山はがらんとしている。一方ここを誰が寒溪さむしいたになどと呼ぶのか、このような素晴らしい泉があるというのに。自ら出かけて見ようではないか、さすれば文殊菩薩の姿がはつきりと目に映るだろう。

こうして菩薩泉から始まった流謫期の交流は、その半年後の「菩薩泉銘」の撰文を以て一応の結実を見た訳であるが、東坡はその後も武昌へと足しげく通い、あまつさえ官界復帰後もそれに因んだ詩を詠い上げるなど、その地への思い入れの強さには一方ならぬものがあつたことが窺える。<sup>(19)</sup> 以上のように、この章では撰文の経緯について概観してきたが、次章ではそれを踏まえて銘文の内容を分析しつつ、その拠り所となったものについて考察してみたい。

### 三

この「菩薩泉銘」の多くの部分が説話に割かれていることは、一読すれば明らかであるが、それだけに東

坡が何に基づいて撰文したのかといった点や、伝わってきた内容をどのように変容させたのかといった点が気になるところである。このうち出典については、東坡自身が銘文の中で、「遠師の文集に載す処士張文逸の文」と「山中の父老伝うる所」に基づいたという意味のことを記しているので、口伝である後者はさておき、前者について少し見ておくこととする。ここに見える張文逸（四八一？～五二二）は南陽宛（河南省）の人で名を孝秀と言ひ、文逸はその字である。<sup>(20)</sup> 彼については簡単な伝が遺されており、それによれば若い頃は地方役人を務めていたが、「処士」とあるように自ら職を辞して廬山の東林寺に居し、持っている田畑からの収入はすべて山に納めたため、その人柄を慕って多くの人々が廬山に集まったという。また彼は博学で佛書にも精通し、『廬山僧伝』を著したとされているので、おそらくその中の慧遠の伝記中にこの説話についても言及し、それが文集に収載されたのではなからうか。<sup>(21)</sup> 惜しいことに、現在見ることでできる慧遠の文集には当該の文は全く見当たらないが、東坡の頃には

二十卷本の『慧遠文集』が伝わっていた記録が残っているので、あるいはそこに収められていたとも考えられる。<sup>22)</sup> いずれにせよ、東坡が目にしたこの説話の最も古い文献の一つが失われてしまった以上、他の書物に引かれているものを通して、銘文との比較を行っていく必要がある。

如来や菩薩にまつわる靈驗譚は古來枚挙に暇がないが、ここに引かれた説話は人物名、地名ともに広く知られているため、それらの中でも比較的よく知られたものの一つに数えられる。次にそれを載せている書物のうち、時代的に東坡より以前のものを年代順に挙げておきたい。<sup>23)</sup>

『高僧伝（梁高僧伝）』

梁慧皎 卷六 廬山の釈慧遠伝

『辯正論』唐法琳 卷二

『弘明集』唐道宣 卷十五

『集神州三宝感通録』唐道宣 卷中

『法苑珠林』唐道世 卷十三

『東林寺碑』

唐李邕（『全唐文新編』卷二百六十四）

『北山録』唐神清 卷三

『義楚六帖』五代義楚 卷一 像化靈異の項

『浄土往生伝』北宋戒珠 卷一

『金像文殊現瑞記』北宋王安石（『廬山志』卷十）

ここに挙げたものの中では、『梁高僧伝』や『集神州三宝感通録』『法苑珠林』に見えるものが詳細な内容を備えており、殊に『梁高僧伝』は張文逸の文とほぼ同時期のものだけに、共通する事項も多く有していたであろうと考えられる。ただ、それらと銘文との違いについて、一々具体例を挙げて検討することは煩雑に過ぎるので、本稿では特に気になる二つの事項を取りあげ、それについて考察を加えておきたい。

その一つは、銘文では阿育王が造った文殊菩薩像とされているものを、単に「阿育王像」あるいは「育王像」と表記しているテキストがかなり見られることである。具体的な書名を挙げれば『梁高僧伝』をはじめとし、『辯正論』『北山録』『浄土往生伝』等がそれに当たる。阿育王とは、言うまでも無く、古代インドを

支配しつつ、一方では佛教に深く帰依したことで知られる人物である。ただ、阿育王像という呼称は、本来阿育王が造った釈迦如来像を意味しており、その姿が阿育王その人を髣髴とさせることもあって阿育王像と呼ばれるようになったとされる。<sup>(2)</sup> こうした説話に見える像が釈迦如来像か文殊菩薩像かといった問題は、単なる名称の違いにとどまらず、菩薩泉の由来となり得るか否かという点にまで及んでくるため、ここで取り上げることにしたのである。いったいに阿育王像崇拜は南北朝時代に南朝の版図、すなわち長江流域を中心にした地域で始まったとされており、『梁高僧伝』は撰述された地域や時期がちようどそれと重なっている。しかもその像の出現にまつわる説話はある程度パターン化されており、広州など南方の漁師が不思議な光に導かれて見つけだし、銘文によって来歴が明らかとなり、やがて光背も別の場所から見つかるといった過程を経るものが多く、こうした内容の点からも『梁高僧伝』に見える説話が、当時の阿育王像崇拜を背景として生まれたものであることはまず間違いない。

では、六朝時代に始まった阿育王像の説話に、いつ頃から文殊菩薩像の説話が混入するようになったのであろう。右に挙げた資料に限っていえば、それを最初に記しているのは唐の初めに道宣が撰した『広弘明集』であり、その内容をさらに敷衍させたのが同じく道宣の『集神州三宝感通録』である。もともと、阿育王が造った釈迦如来像とされていたのを文殊菩薩像に代えるには、人々を得心させるための理由が必要であると考えたのであろう。そのため『集神州三宝感通録』には、もともと凶暴であった阿育王が改心して佛教を信仰するようになったきっかけに、文殊菩薩が大いに関わっていて、それがひいては造像につながったと説いている。

昔の伝に言う。阿育王がこの地方（南海）を治めていた時のこと、罪人を裁くのに鬼王のやり方を学んだため、たいそう酷たらしい刑に処していた。ところが罪人を茹でる釜の中に文殊菩薩が現れると、火を盛んに燃やしても水は清らかで、青蓮華が咲いたので、王はそれまでの誤りを悟り、すぐ

さま牢獄を取り壊した。さらに八万四千基の佛塔を造り、またその姿を摸した像を同じ数だけ造ったが、この文殊菩薩像はそのうちの一体である。

右に挙げた説話の元になったものは、阿育王の事蹟を中国に広めた西晋の安法欽訳の『阿育王伝』や梁の僧伽婆羅訳の『阿育王経』、あるいは梁の僧祐の『釈迦譜』に確かに見えているが、そこでは鉄の釜で茹でられても、平然として蓮華上に座することができたのは一人の比丘であり、煩惱を除いて阿羅漢果を得た結果そのようにできた<sup>(5)</sup>とされている。道宣の説話は、その比丘を文殊菩薩の化身であると読み替えたもので、やがてこれが後世におけるこの説話の主流となつていったのである。このように説話内容の変化を辿ってみると、道宣の創意に出たとは断言しきれないものの、少なくともその名声によつてそれが定着していった様が見て取れよう。ところで、こうした中国における阿育王受容史の中で捉えると、東坡が挙げた張文逸の文もやはり文殊菩薩像ではなく、単に「阿育王像」とされていた可能性はかなり高いと言わざるを得ない。ただそうな

ると、先に述べたように菩薩泉という名前の由来にはなり得ないため、後世の文殊説話と重ね合わせる事によつて整合性を図つたのではなからうか。

この文殊菩薩像をめぐる説話の中で、もう一つ注目したいのは、銘文の構成上の問題である。この文はもともと、広州で見つかった像が陶侃によつて寒溪寺に送られ、最後は慧遠によつて廬山に納まるという展開を見せるが、もしそこでもう一度武昌にある寒溪の泉に話を戻そうとすると、どうしても読み手に唐突な感を抱かせることとなろう。そこで東坡は、会昌の廢佛をきっかけに像が姿を消し、代わりに光り輝く現象が現れるという話を挿むことにより、話の流れがなるべく滞らないように工夫したと思われる。これは光によつて見出された菩薩像が、数々の不思議な現象を起こした後、再び山中に姿を消して光につつまれるといった、冒頭の主題が回帰する形をとることにより、話に完結性が付与されることを計算してのことであろう。そして菩薩像の話が完結したことにより、もう一度寒溪に無理なく話を移行することが可能になったと考えれば、

この四十字余りの挿話の持つ意味の重さは自ずと理解できよう。

では文の構成上重要な意味を持つこの後日談を、東坡は何をもとに記すことができたのであろう。張文逸の文や『梁高僧伝』はもとより、右に挙げた文献のうち唐代にまとめられたものはすべて会昌以前に撰せられたものであり、残る五代から宋代にかけての三本にも当該の記事は見当たらないか、もしくは銘文に結びつくほどの詳細さは備えていない。おそらくそれについて東坡自身が示唆したのが、銘文中にある「山中の父老伝うる所」という言葉であろう。ただこの言葉をそのまま受け取れば、東坡が廬山に住む古老から直接聞きとったかのように解せられるが、この時点で東坡は廬山を訪れたことが無かったので、やはり廬山と深いつながりを持つ李常を介して、その情報が得られたと考えるのが穏当であろう。それまで話題になっただけながら半年も撰せられることのなかった銘文が、李常の来訪を機ににわかに書き上げられたのは、そういうレトリック上の理由があったとも考えられるのである。

る。

以上、銘文に見られる二つの問題点について触れたが、ここでもう一つ検討しておきたいのは、あるいは右に挙げた文献以上に、銘文と深い関わりがあったかもしれない書物が存在する点である。それが東坡と李常の双方にとつて親しい友人であった陳舜俞が著した『廬山記』である。陳舜俞（字は令舉。一〇二六—一〇七六）は湖州烏程（浙江省）の人で、進士及第のち地方官となったが、上疏して新法を糾弾したため南康軍へと左遷された。<sup>(26)</sup> この地は廬山に近かったため彼は山麓に居を構え、山中を隈無く歩きまわってはその見聞きしたところを記録にとどめることに努めた。これに賛同したのが長年この地に住み続けていた劉渙という人物で、当時かなりの高齢であったにもかかわらず山行を共にし、自身がまとめた資料も提供するなど編集にも協力を惜しまなかったという。こうして熙寧五年（一〇七二）に編纂されたのが『廬山記』五巻で、それは単にこの廬山に関する情報を要領よくまとめ上げたと言うにとどまらず、古老の話に耳を傾け、

夥しい碑文の一つ一つを丹念に記録するなど、精緻な学問的姿勢が貫かれたものとして高く評価されている。<sup>(27)</sup>

この『廬山記』は、その内容と言い、書き上げられた時期と言い、東坡の銘文に深く関わっていたとしてもおかしくはないが、それを明らかにするには陳舜俞が東坡や李常とどのように交遊していたかを見ておく必要がある。この『廬山記』が書き上がった二年後の熙寧七年七月に、東坡は杭州で陳舜俞に出会って詞を贈り、さらに九月には、子供が生まれたばかりの李常を祝福するため、舟に同乗して湖州に赴いている。後年、その時のことを思い出して綴ったのが「垂虹亭に遊ぶを書す」(『蘇軾文集』卷七十一)の一文である。<sup>(28)</sup>

私が昔杭州より高密に移ったとき、楊元素と同じ舟に乗り合わせた。陳令拳(舜俞)や張子野も私に付き添って李公拱(常)を湖州に訪ね、そのうち劉孝叔も一緒になって松江にまでやって来た。夜半になると月が出たので、垂虹亭の上で酒を酌

み交わした。……一座の者はないそう喜び、酔いつぶれる者もいた。この時の楽しさは未だに忘れたことが無い。

『廬山記』には李常と劉渙の序文が付されているが、そのうち前者によれば、この歡を尽くした松江での宴会の翌年、陳舜俞は呉興(浙江省)の太守となって赴任した李常のもとを訪れて同書を示し、開版して山中に納めたいと願ひ出ている。おそらくこうした交流を通して昵懇になったことに加え、廬山所縁の人物というところから依囑を決めたのであろう。ところが、折悪しく李常が済南へと任地替えになったため、折にはそれが果たせないまま、翌年に陳舜俞は世を去ってしまうこととなる。<sup>(29)</sup>生前にこの書を託された李常は、おそらく身辺に携えるなどして保管し、世に出す機会を待ち望んでいたことであろう。そうした折、たまたま流謫地にいる東坡を見舞ったところ菩薩泉へと案内され、そこが『廬山記』にも引かれている説話に大いに関わりのある場所であることに気がついたのではあるまいか。勿論、親密な間柄の三人であれば、これよ

り以前に同書が話題に上っていた可能性もあるが、その時点では東坡が武昌の対岸に流されるとは誰も知る由がなかったであろうから、やはり李常が語る『廬山記』の内容が、東坡に撰文を決心させたと考えるのが穏当であろう。

ここで『廬山記』の中に見える文殊菩薩像に関する記事を拾い上げてみると、最もその本末を詳細に記しているのは、同書の卷一、山北を叙するの項である。<sup>(10)</sup>

(白蓮) 池の畔にむかし文殊瑞像閣があったが、今は像は無く閣も廢されている。また文殊殿があり、その瑞像は、晋の陶侃が初め広州の刺史であったとき、浜に住む漁夫がいつも夜にあでやかな光を目にしたので、それに網を打って手に入れた黄金の文殊菩薩像であり、その側面にはむかし阿育王が鑄造させたものであると記してあった。その後、ある商人が東海で円い光背を手に入れたので、持って行って像に合わせるとまるで繕ったかのようになりたり合わさった。やがて陶侃はそれを武昌の寒溪寺へと送った。かつて住持の僧珍が夏口

に出かけた時、夢の中で、寺が火事になったのにその像と建物だけは神物を取り囲んで守っているのを見た。珍があわてて寺に戻ったところ、果たして寺は焼けてしまっていたが、ただ像と建物だけは残っていた。陶侃が任地替えとなつて江州を治めることになった時、像に不思議な力があるため、わざわざ人をやって出迎えることとし、自らもそれに付き従つた。しかし夜になると風と波のために船が沈んでしまったため、当時の荊楚の人は謡つて言つた、「陶はただ劍の勇者に過ぎず、この像は神性が形をとつたもの。雲にかけ上がり泥にも宿り、その本当の姿は何とも捉えようがない。ただ誠実さで招かねばならず、力を恃んではならない」と。そのうち慧遠法師が東林寺を開くにあたり、川のほとりで禱つたところその像が再び姿を現した。廬山に迎えたばかりの時は神運殿に安置していたが、後には幾層もの高閣を立て、香と灯明を絶やさぬようにした。李邕の寺記に、「阿育王に罪を贖あがなわせようと、文殊菩薩が姿を現す。

海を踏み分けても沈まず、陶侃を駭かせ、火が迫っても焼けず、僧珍の夢に入る」と言っているのは、このことを指している。<sup>(1)</sup> 会昌年間に佛寺を壊すことになった時、二人の僧侶は像を背負って錦繡谷の峯頂に隠した。その後、隠しておいた所を訪ねても見付けられなかったので、二人の僧は互いに相手が匿したのではないかと疑ったが、俄に円い瑞光が虚空に現れた（のでその誤解はとけた）。そのため、今でも旅人の中には、峯頂にある佛手巖の天地院にまでやって来て、その光る姿を見ることのできる者もいる。

また同項には、菩薩像を隠した場所についても、次のように記している。

宝林から一里ゆくと擲筆峯に至る。……むかし遠公が『涅槃経』の疏をこの場所で著し、書き上がったために峯の名としたのである。その間にある一つの峯を文殊峯と呼んでいる。これがむかし文殊菩薩像を隠してこの山中で行方知れずになったという場所である。

もとより李常が託された書物を黄州まで携えてきたかどうかは不明であるが、少なくともその内容を東坡に伝えるのに吝かではなかったであろう。そう考えると、会昌の廢佛以降の出来事についての話を古老から聞き取ったのは陳舜俞であり、それを李常は陳舜俞から直接か、もしくは『廬山記』を通して知り、さらに東坡に伝えたというのが実情であつたのかもしれない。もしそれが正鵠を射ているとすれば、銘文中に陳舜俞の名や『廬山記』という書名が一切見られないのは、ひとえに文字の獄以来、東坡が友人を党派の争いに巻き込まないよう、細心の注意をはらつた結果ということになる。もっともこの時には、陳舜俞が亡くなってすでに四年が経っていたが、その心血を注いだ著書はこれから李常によって上梓されようとしている時期であり、それへの妨げになるのを極力避けるため、「張文逸の文」と「父老の伝」という表現をとつたと見るべきであろう。

「菩薩泉銘」を撰してから四年後の元豊七年（一〇八四）、五年にわたる黄州流謫を解かれ、東坡に

は汝州（河南省）へと遷るよう命が下された。同年四月、武昌にも立ち寄りながら長江を下った東坡は、長年訪れたいと願っていた廬山へと足を運んでいる。その様子を記したのが「自ら廬山の詩を記す」（『蘇軾文集』卷六十八）の一文であるが、そこにははっきりと『廬山記』が撰者の名とともに記されている。<sup>33)</sup>

私は初めて廬山に分け入ったが、山も谷もその秀拔さは、平生目にしたことのないものであった。……この日、陳令拳（舜兪）の『廬山記』を手渡してくれた者がいたので、それを読みながら歩き続けた。……山の南と北を行き来すること十日余り、その絶景はとても言葉では言い表せないものに思われた。中でもとりわけ優れた景色を選ぶとすれば、漱玉亭と三峽橋にまさるものは無いであろう。

この文面からは、東坡に『廬山記』を手渡したのが誰なのかは読み取れないが、同書が成つてすでに十二年が経ち、上梓はまだでも、徐々に書写されたものが広まりつつあったことを窺わせるとともに、旧法党への

逆風がおさまりつつあったこの時期、もはや書名や撰者名を口にするのを憚る必要など無くなったことを読み取ることができる。時代は確実に、二年後に始まる元祐の硬化へと向かっていたのである。

#### 四

本稿で取り上げた「菩薩泉銘」が、黃州流謫の初年に撰せられた事は前に述べたが、ここでは東坡をとりまく状況を、著述という面からもう少し詳しく見ておきたい。この時期の詩文撰述における特徴は、これもすでに述べたように烏台詩案の名で呼ばれる文字の獄の影響を抜きにしては考えられない。その詩文によって自らが黃州という辺鄙な地に流されたのみならず、多くの知人にも累を及ぼすこととなったこの事件は、そう容易く忘れ去ることなどできないからである。そう考えると、この時期の東坡にとって、再びその綱に掛からずすむにはどうしたらよいかが大きな命題として突きつけられたことになる。もとより奔放さが

持ち味の一つであった東坡であるが、ここにきて思うさま筆を走らせることに躊躇いが生じ、詩文を撰ずるのにきわめて神経質にならざるを得ない情況に陥ったのは当然のことと言えよう。

こうした情況は、当然生み出される作品の数にも影響を及ぼすことになる。ここで二月一日に東坡が黃州に着いてから、おそらく銘文を書き上げたであろう十月から十一月までの間、どれ程の文を撰述したかを見ておくと、本格的に手掛けられた撰文は数えるほどしか確認できない。たとえは到着して早々に奉られた「黃州謝表」や、九月に相次いで書かれた文彦博や呂公著への賀啓「賀文太慰啓」「賀呂副枢啓」など儀礼的なものを別にすれば、八月に亡くなった乳母のための「乳母任氏墓誌銘」（『蘇軾文集』卷十五）と、九月に蜀の大慈寺勝相院からのたつての依囑により筆を執った「勝相院経蔵記」（『蘇軾文集』卷十二）などが挙げられるのみである。いくら慣れない新天地での生活が始まったばかりの時期とはいえ、それだけが寡作の原因とは考えられず、先に触れたような文字の獄が心に重くの

しかかり、それがこうした数に表れたと推察される。

ただ、そうした厳しい環境の中、徐々にではあるがどこからも制約を受けない文の内容と表現を模索し、その答えを見出しつつあったのも確かであろう。右に挙げた経蔵記のように、佛教に関する内容であれば、何等差し障りが生じることなど無いであろうとの思いも、その答えの一つであったようで、友人に宛てた手紙の中で、「『経蔵記』は皆迦語（釈教文）にして、思うに醞釀する（無実の罪に陥れる）に由無し。故に敢えて之を出だす」（『滕達道に与う』第十五簡『蘇軾文集』卷五十一）という言葉を遺しているのが、何よりもそのことを物語っている。このように考えてくると、「菩薩泉銘」が殆ど佛教説話によって成り立っていることや、李常以外の友人たちとの関わりに一切触れていないことも、すべてこの時期ならではの書きぶりとして評することができよう。

この銘文を、その構成と表現の平易さから、依囑の責を塞ぐために説話を適当に継ぎ足したものと見做したならば、それは物事を表面的にしか見ていないこと

になろう。もとより撰文における東坡の本領は、齒に衣着せず、しかも滾々と尽きることのない大河のような饒舌さにあることは言うまでもない。しかし、それが許されない状況下にあつて、撰文は如何にあるべきかを模索した結果、こうした簡潔さにたどり着いたとするならば、これもまたまぎれもない東坡の筆力と評することができよう。

## 注

(1) 「菩薩泉銘」は『東坡七集』では釈教類ではなく、前集の巻二十、銘類に収められている。また『東坡禪喜集』では、明の陳繼儒が編んだ九巻本の系統では巻四に収められているが、明の凌濛初が編んだ十四巻本には採られていないなど、扱いに違いが見られる。これは教理的な内容を殆ど含まず、靈驗譚を主としていることに因つているのであろう。

(2) 黄州流謫期に東坡のもとを訪れた人物について、『東坡詞編年箋證』(一三三三頁)は、「公黄に貶せらるること五載、來訪せる者頗る多し。徐君猷、孟亨之、王齊愈、齊万兄弟、馬処厚、蹇序辰、楊元素、參寥等十数人の如し。然して或いは過客と為り、或いは常客と為り、友情甚だ篤くして遠道を來訪せる者、唯李常、楊元素、參寥の三人のみ」と記している。なおこれ以外では、張舜民も元豐六年九月に黄州に立ち寄り、

共に武昌の寒溪寺や西山寺を訪ねたことを「柳行録」(『西塢集』巻八)の丙寅の條で述べている。ただその中で「下の寺に觀音泉あり、澄澈愛すべし」と記しているのは、或いは文殊菩薩と觀世音菩薩を取り違えたものか。

(3) 杜沂について查慎行の『補注東坡編年詩』などでは失考とするが、王文誥の『蘇文忠公詩編註集成』巻二十では、蜀中に住み宜州の通判を務めた杜君懿(字は叔元)の子で、この後東坡と武昌寒溪に渡つた杜道源と同一人物であるとす。なお『明一統志』巻六十七、成都府の條に「餘醴花。成都県出。蜀人酒を造る」と記するところからすれば、彼が東坡に餘醴の花を贈つたのは、蜀ゆかりの花であつたからであらう。

(4) 「願君揚其名、庶託文字伝」の句に対して二説あることは、『四河入海』巻二十ノ一に載せる同詩の注に詳しく記されている。ただ「君」が杜沂を指すとしても、最後の四句で東坡が謙遜している点から推し量ると、まず東坡に銘文の依頼があつたことが前提となるであらう。

(5) 光緒十一年重脩『武昌県志』(『中国地方志叢書』所収)巻一、山川の項によれば、西山は県城の西三里(清朝の一里は五七六米)にあり、高さは七十六丈(清朝の一丈は三三三米)。樊山は同じく五里にあり、高さは九十丈であると言う。なお両山は相接しているが、樊山を西山の古名あるいは別名としている文献もあり、清朝では俗に九曲嶺以北を西山と言ひ、樊口に臨んでいる辺りを樊山と呼んでいる。なお寒溪や西山の辺りには、後世、東坡を祀つた蘇文忠公祠や晋の陶侃や唐

の元結とともに祀った三賢祠、黃庭堅とともに祀った蘇黃祠などが建てられた。

- (6) この文には樊山の名の由来や、山中の古蹟について詳しく記されている。また治平三年に父親の柩を扶けてここを通ったことは、「十五年前、之に過る」の語によって知ることができ。なお同文は『東坡志林』巻四にも収められている。

- (7) 『三国志』呉書の呉主伝には、黄初二年（二二二）に孫権が公安から鄂に移ってそこを都と定め、さらに武昌と改名して、武昌、下雒、尋陽、陽新、柴桑、沙羨の六県で武昌郡を立てたことが見えている。

- (8) ここに言う「孫郎」を『四河入海』では孫策を指すとするが、この地の旧蹟であれば弟の孫権とすべきであると考え、それに従って訳しておいた。

- (9) 陶侃の伝は『晋書』巻六十六に見えている。

- (10) 慧遠は、前秦の建元十五年（三七九）に師の道安が符堅によって襄陽から長安に連れ去られると、戦乱を避けるために南下して荊州の上明寺に入り、さらに太元九年（三八四）に廬山の東林寺に入ったとされている。その伝記に武昌に立ち寄ったという記録は見えないが、おそらく荊州から廬山に向かう途中のことであろう。なお『武昌県志』巻六、寺観の項には、晋の太元中に慧遠が西山寺を建てたとの記載がある。

- (11) 徙居買田については西野貞治「東坡詩の買田の語について」『人文研究』十九（一）や、竺沙雅章「北宋士大夫の徙居と買田——主に東坡尺牘を資料として——」『史林』五十四（二）に詳しい。

- (12) 「陳季常に与う」第七簡（『蘇軾文集』巻五十三）。

- (13) 東坡は「子由と共に寒溪西山に遊ぶ」（『蘇軾詩集』巻二十）の詩を詠じ、蘇轍も「黃州にて子瞻に陪なごい武昌西山に遊ぶ」（『樂城集』巻十）の詩を詠っている。後者に「上方は雲端に寄り、中寺は巖腹に倚る。清泉牛乳に類し、煩熱一掬を須う」とあるのは、菩薩泉のことであろう。

- (14) この句は「武昌に菩薩泉を酌み、王子立を送る」（『蘇軾詩集』巻二十一）の詩に見えている。

- (15) 李常については、蘇頌の「龍閣閣直学士知成都府李公墓誌銘」（『蘇魏公集』巻五十五）が詳しい。

- (16) 李常が黃州にやって来た時期について『三蘇年譜』巻三十には、秦觀に宛てた東坡の手紙（秦太虚に与う）第四簡「蘇軾文集」巻五十二）に「公扱（李常）近ごろ此に過ぎり、相聚まること数日、太虚（秦觀）を説きて口を離れず」とあるのを引き、「歳晩に作る。常の来たるは約十一月と為す」と記している。なおこれは「東坡詞編年箋證」の説に従ったものであるが、同書は来訪時期を十月とする。

- (17) 会昌年間の佛教弾圧は唐の武宗の命によるもので、会昌元年（八四二）から同六年（八四六）にかけて行われた。これは中国佛教史上の大きな法難とされる三武一宗の廃佛の一つに数えられる。弾圧は東林寺にも及び、「社主遠法師」（『廬山記』巻三）の伝に、「唐の会昌五年（八四五）乙丑、寺廢さる。大中二年（八四八）戊辰、復す」と見えている。

- (18) 廬山のみならず五台山や峨眉山でも見られると言う光の現象は、現在、佛光と呼ばれている。

(19) 武昌での交遊は東坡に忘れがたい印象を与えたため、六年後の元祐元年（一〇八六）に、かつて武昌の令を勤めた鄧聖求と旧事を語り合った際に「武昌西山」（『蘇軾詩集』巻二十七）の詩を詠じ、さらにそれに和する者が多く出ると、それに謝するため「西山の詩和する者三十余人、再び前韻を用いて為に謝す」（『蘇軾詩集』巻二十七）の詩を詠じている。

なお前者については東坡の墨蹟が遺され、『景蘇園帖』三希堂石渠宝笈法帖』『谷園摹古法帖』等に刻入されている。

(20) 張文逸の伝は『梁書』巻五十一、『南史』巻七十六、『居士伝』巻十などの他、『廬山志』（中国仏寺史志彙刊）所収）巻九にも見えている。

(21) 張文逸が『廬山僧伝』を選したことは『梁高僧伝』の序文に見えている。

(22) 慧遠の文集についての最も古い記録は『隋書』経籍志に見える『晋沙門釈慧遠集』十二巻で、それが『旧唐書』経籍志の『沙門慧遠集』や『唐書』芸文志の『僧慧遠集』になると十五巻本となる。さらに北宋時代になると『匡山集』二十巻が世に伝わっていたことが『廬山記』巻三に見えている。なお、慧遠については木村英一編『慧遠研究』（一九六二年、京都大学人文科学研究所刊）が刊行されており、文集についてはその中の牧田諦亮「慧遠著作の流伝について」に詳しい。文殊菩薩像の説話を載せている文献の撰述年を記しておく、次の如くである。

(23) 『高僧伝』慧皎（四九七〜五五四）、天監十八年（五一九）以後撰。

（『隋天台智者大師別伝』灌頂（五六一〜六三三）撰。）  
『辯正論』法琳（五七二〜六四〇）、武徳九年（六二六）以後撰。

（『統高僧伝』道宣（五九六〜六六七）、貞観十九年（六四五）撰。）

『弘明集』道宣、麟徳元年（六六四）撰。

『集神州三宝感通録』道宣、麟徳元年（六六四）撰。

『法苑珠林』道世（？〜六八三）、総章元年（六六八）撰。

『東林寺碑』李邕（六七五〜七四七）、開元十九年（七三二）撰。

『北山録』神清（元和年間（八〇六〜八二〇）に卒す）撰。

『義楚六帖』義楚（九〇二〜九七五）、顯徳二年（九五五）撰。

『浄土往生伝』戒珠（？〜？）、雍熙年間（九八四〜八七）撰。

『金像文殊現瑞記』北宋王安石（一〇二一〜一〇八六）、元豊元年（一〇七八）撰。

この文は清の蔡上翔『王荆公年譜考略』巻二十一にも見えているが、何故か王安石の文集には採られていない。

(24) 阿育王（梵名 *Asoka*、無憂王とも漢訳す）は、紀元前三世紀頃にインドを統一に導いた王で、若い頃は凶暴であったが、戦いの惨状を目にして心を痛め、佛教に帰依してその保護に力を尽くしたとされる。佛舍利を納めた塔を八万四千基造ったという伝承から、中国でも四世紀頃になるとその阿育王の塔が出現したとされ、寧波に阿育王寺が建立されるなど信仰の対象にもなっていた。本稿で取り上げた金像も、そうした影響下から生まれたものであろう。因みに、東坡の墨蹟と

して知られる「宸奎閣碑」は、その阿育王寺に建てられた楼閣のために撰文、撰書したものである。なお参考までに、阿育王像についての論考を次に挙げておく。

肥田路美「中国皇帝と阿育王像」(『仏教』文明の受容と君主権の構築)二〇一二年、勉誠出版刊)

金子典正「阿育王像濫觴考―阿育王像説話の成立をめぐる―」(『てらゆきめぐれ 大橋一章博士古稀記念美術史論集』二〇一三年、中央公論美術出版刊)

肥田路美「四川で出土した南北朝時代の仏教石像をめぐる」(『アジア仏教美術論集 東アジア』二〇一七年、中央公論美術出版刊)

(25) この話は「阿育王伝」巻一、本施土縁の項や「阿育王経」巻一、生因縁の項、及び「釈迦譜」巻五に見えているが、それぞれ内容は若干異なっている。

(26) 陳舜俞の伝は『宋史』卷三百三十一、「嘉泰会稽志」卷七、「至元嘉禾志」卷十三にそれぞれ見えている。

(27) 『廬山記』は『大正新脩大藏経』五十一(二〇九五)所収。これは高山寺蔵の宋刊本(卷二、三)と旧抄本(卷一、四、五)を底本にしたもので、羅振玉の跋文が付されている。その後、佐伯藩主毛利高標の旧蔵で後に幕府に献上され、現在は国立公文書館に所蔵されている宋版の完本が見つかり、影印本も刊行されている。因みに、『廬山記』は熙寧五年に完成したとされるが、その中に後年の記事が見られる。同書卷二、山南を叙するの項に、「楞伽院に李氏の山房有り。李名は常、字は公沢。少き時兄弟書を山中に読む。既に去って寺僧其の

室を虚して居せず。因て書を室中に蔵す。幾んど万卷なり。蘇子瞻賦、山房蔵書の記を作る。今石に刻みて壁間に留む」とあるが、東坡が「李氏山房蔵書記」を書いたのは、『東坡紀年録』熙寧九年の條に「十一月朔作李氏山房蔵書記」とあるところから、同年の十一月一日とされる。仮に陳舜俞が完成後も手を加えていたとしても、同年は彼が卒した年に当たっており、石に刻して云々との記述までは書けないであろう。

今伝わるテキストは、後世誰かが手を加えたか、或いは『東坡紀年録』の内容に誤りがあったと見るべきであろう。ここでは問題を指摘するだけに止め、後考を俟ちたい。なお参考までに、『廬山記』についての論考を、未見のものも含めて次に挙げておく。

宮澤正順「『廬山記』について」(『曾慥の書誌的研究』二〇〇二年、汲古書院刊)

大塚秀高「北宋の陳舜俞撰『廬山記』の誕生とその構成をめぐる」(『中国詩文論叢』第三十六号、二〇一七年)

植木久行「北宋の陳舜俞撰『廬山記』考―香炉峰の瀑布と酔石の詩跡研究を含めて」(『中国古籍文化研究』二〇一八年、東方書店刊)

(28) この文は『東坡志林』巻一にも「松江に遊ぶを記す」と題して載せられている。

(29) 陳舜俞の逝去にあたり、東坡は「陳令拳を祭るの文」(『蘇軾文集』卷六十三)を撰し、追悼の情を綴っている。

(30) 『廬山記』卷三に載せる慧遠法師の伝にも、この説話中の次のような箇所が引かれている。

先に阿育王文殊の像有り。武昌の水中に沈み、陶侃得る能わず。ここに至りて飄然として軽く拳がり、迎えて神運殿に還り、以て佛事を修す。また鬪賓道人共に佛影台を作るに因りて、皆神感有り。事は高僧伝に具さなり。

(31) 『廬山記』に引く李邕の「東林寺碑」には異同が見られるので、次にその校勘記を付しておきたい。なお本文中の訳は宋版『廬山記』に依っている。

〔李邕「東林寺碑」〕

踏海不沈、駭於陶侃、迫火不爇、夢於僧珍、

〔宋版『廬山記』〕

踏海不沈、駭於陶侃、迫火不爇、夢於僧珍、

〔大正新脩大藏經『廬山記』〕

踏海不沈、驅於陶侃、迫火不熱、夢於僧珍、

(32) この文は『東坡志林』卷一にも「廬山に遊ぶを記す」と題して載せられている。